

宇治十帖の「明けぐれ」論*

－『源氏物語』正編の受容と変容を中心に－

尹 勝 玫**

『源氏物語』以前はあまりその例を見出すことのできない「明けぐれ」という語は、『源氏物語』を通してその文学的な位相が確立されるようになる。物語のなかでは全十三例現れているが、まだ夜が明け切る前の薄暗い時間帯を表す「明けぐれ」という語は、いくつかの物語の展開に重要な場面に用いられ、単なる物理的時間帯を示す次元を超え、各登場人物の晴らしがたく悲痛な心境や絶望感などの心的状態を表す言葉としてその具体的な意味やイメージが作り上げられていく。またこの言葉は、いわゆる「源氏取り」の核心をなしている言葉でもある。とくに柏木物語を通して構築された「明けぐれ」の語の引用により、宇治十帖で薫と女君との恋物語の悲劇性を一層鮮明にするとともに、薫の運命の行方をも予見する。ただし、宇治十帖では単に柏木物語の要素を踏襲して受け入れるのではなく、宇治十帖の論理に基づき、さらなる想像力を発揮して再創造している。このような柏木物語、さらには『源氏物語』の正編の意図的な受容と変容。これこそ、宇治十帖における最も特徴的な引用のあり方であり、それにより、宇治十帖の独自性は保たれ、新たな物語として織りなしていくことができたのである。

キーワード：明けぐれ、心的時間、源氏取り、薫、柏木

1. はじめに

夜明けを表す日本語としては、たとえば次のようなものがある。「暁」「明けぐれ」「しののめ」「あけほの」「あさぼらけ」などがそれである。これらの言葉は現代日本語と比べ、その意味が少し異なっている部分はあるものの、古代より存在していた。夜明けに関する言葉がこの

* 本論文は、尹勝玫(2012)の博士論文のうち、Iの第二章「引用と想像力ー「明けぐれ」を手がかりとしてー」の一部を参考にし、修正・加筆し、新たに書き直したものである。

** 永同大学校 日本語科 非常勤講師、日本古典文学専攻

ように細かく細分化されているのは、時間の推移によって少しずつ変わるその状態の微妙な変化を古代人が重視したからではないだろうか。

本稿ではこうした言葉のなか、とくに「明けぐれ」という語に注目して考察を行うことにする。「もうすぐ夜明けだと待っているのに、まだ暗い頃」¹⁾を意味するこの言葉は、『万葉集』に二首が詠まれ、歌語として用いられてはいるが、実は『源氏物語』以前はあまりその例をみることができない。平安時代に入り、『拾遺集』にまた二首が詠まれているが、当時の主要歌集である『古今集』『後撰集』『古今六条』などにはまったくその例がみられない。散文の方も同じく、『うつほ物語』『枕草子』にそれぞれ一例ずつあるのみで、ほかの作品からはその用例を見出すことができない。しかしながら、『源氏物語』のなかでは十三例も「明けぐれ」という言葉がみられ、しかもいくつかの重要な場面に用いられ、深い印象を残しているのである²⁾。以前の作品ではあまりその例をみることもない言葉が、ある作品において多く表れているということは、まさにその作品を通して言葉の意味やイメージなどが確立されたともみてよいのではないだろうか。「明けぐれ」という言葉を考察するのは、こうした文学史的な観点からしても意義のあることであると思われる。

さらに「明けぐれ」を分析する際、「源氏取り」という問題とも関連付けて考える必要がある。『源氏物語』第三部ではすでに正編で書かれている部分を自ら引用し、物語展開の一つの方法としているという、いわゆる『源氏物語』による「源氏取り」が頻繁に行われており、またそれが第三部

1) 大野晋 他編(1974)『岩波古語辞典』岩波書店、p.15.

2) 先行研究では「明けぐれ」の事例を十二例とする論が多い(高橋亨(1977)「源氏物語の内なる物語史」『源氏物語対位法』東京大学出版会、p.160、小町谷照彦(1984)「レトリックとしての歌ことば一薫の大君への求婚の形象」『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会、p.288など)。しかし、ここでは野分巻の例について少し考えてみたいのである。青表紙本系の大島本では、ここが「あけほの」と記されているが、朱で「あけくれ」と異同があることを傍記している。定家筆写本をはじめ、三条西家本、河内本、陽明文庫本など、諸本の多くは「あけくれ」となっている。『新全集』では定家筆写本を野分巻の底本としているため、本文が「明けぐれ」となっている。一方、『源氏物語大成』『集成』『新大系』などでは、「あけほの」と本文が立てられている。『源氏物語』の「明けぐれ」の用例を十二例とするのは、それに従ったためであろう。野分巻の例に関しては議論の余地があるのは事実であるが、『新全集』で記されているように、「明けぐれ」としてじゅうぶん認めるべきであると思われる。したがって本稿では「明けぐれ」の例を野分巻の例を含めた十三例とする。

の重要な特徴であるという見解がある³⁾。「明けぐれ」は「源氏取り」の重要な言葉の一つである⁴⁾。こうした点に注目し、ここでは宇治十帖の「明けぐれ」に重点を置いて分析を進める。『源氏物語』の正編で確立された「明けぐれ」のイメージがいかなる論理で宇治十帖に受容され、物語の展開へ影響を与えているのかについて明らかにしたいのである。つまり、「明けぐれ」の引用が物語の全体像を考える際、いかに物語独自の論理を導き出しているのか、そしてそれが宇治十帖の主題や世界観のもとでどのように変容し、再生産され、その後の展開につながっているかを明確にし、「明けぐれ」の意義を新たにまとめるのが本稿の主な目的である。

2. 『源氏物語』正編の「明けぐれ」—柏木物語を中心に

「明けぐれ」の「ぐれ」の部分は、漢字で書くとき、「暮」あるいは「暗」を使うことがある。「明」と「暮(暗)」という、相反する要素が一つの言葉として構成されている点から、この語の持つ複雑な性格をうかがうことができるであろう。

『源氏物語』のなかではじめて「明けぐれ」の例がみられるのは、須磨巻である。無実の罪に問われ、須磨退去を余儀なくされた光源氏。源氏は下向の前、深い親交を持っていた人々と惜別の情を交わすのであるが、花散里を訪ね、別れを惜しんだ後、その邸を去っていく様子が「「……思へばはかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ」(須磨②176)⁵⁾

3) 高橋亨(1977)注2の前掲書、pp.153-163、池田和臣(2001)「引用表現と構造連関をめぐって—第三部の表現構造—」『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院、pp.204-245など。ただし、その用語については統一されておらず、たとえば池田氏は「『源氏』取り」と命名しており(池田和臣(2001)の前掲書、p.323)、井野葉子氏は「正編取り」と呼んでいる(井野葉子(1997)「[研究の現在と展望]—宇治の風景—」王朝物語研究会編『研究講座 源氏物語の視界5 薫から浮舟へ』新典社、pp.376-384)。なお、本稿ではそうした物語の方法を「源氏取り」と称することとする。

4) 高橋亨(1977)注2の前掲論文、p.155.

5) 『源氏物語』の本文の引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館)による。引用部分の括弧内の表記は巻名、巻数、頁数を表す。なお、引用に際しては表記を私に改めた

と描かれている。自分の身の潔白を訴え、花散里を慰めてはいるものの、「かばかりの対面もまたはえしもやと思ふこそ」(須磨②175)と、須磨へ退去することにより、親しい人々ともいよいよ会えなくなるという現実には「ただ、知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」とあるように、やはり心が暗くなる源氏であった。源氏のやるせない思いを総括して表すような、直前の「心をくらす」という叙述ともあたかも響き合うように、花散里邸を後にし、光源氏が帰るその時間帯が「明けぐれ」と設定されている。

若菜上巻で光源氏は新たに女三宮を正妻として迎え入れる。源氏は長年自分に付き添っていた最愛の妻である紫上を差し置き、女三宮と夜をともに過ごすことで夫としての義務を果たすのであるが、新婚三日目の夜の源氏の夢に紫上が現れる事態が起きる。紫上の心痛を誰よりも理解していた源氏は、彼女のその苦悩が夢として表れたと思い、新婚三日目という最も大事な日であるにもかかわらず、最低限の誠意だけを尽し、女のもとから帰るにはまだ早い時間ではあるが、急いで紫上のもとに帰ってしまう。その際の様子、物語には「いかにと心騒がしたまふに、鶏の音待ち出でたまへれば、夜深きも知らず顔に急ぎ出でたまふ。……明けぐれの空に、雪の光見えておぼつかなし」(若菜上④68-69)と記されている。紫上の境遇を不憫に思い、一刻も早く彼女のもとに帰りたいという源氏の複雑で暗鬱な心境が「明けぐれ」という言葉に代弁され、表現されているのである。

このような「明けぐれ」に対し、先行論では、単なる明け方の時や薄明の状態など、外部時間を示すのではなく、「いずれも深刻な状況における情景設定に用いられ、晴らしがたい鬱屈した心情の心象風景」⁶⁾を表現していると説いたり、「夢のような存在感覚の錯乱を象徴する心的時間」⁷⁾、あるいは「心の深切な闇を浮かび上がらせる典型的な喩の時間」⁸⁾であると説明している。つまり、登場人物の悲痛で絶望的

ところがある。

6) 小町谷照彦(1984)注2の前掲論文、p.288.

7) 高橋亨(1977)注2の前掲論文、pp.156-157.

8) 河添房江(1988)「宇治の暁 - 闇と光の喩の時空 -」『源氏物語の探究』第十三輯、風間書房、p.207.

な心理状態を表す際に用いられていることが分かる。前述した二例もまさにそうした説明にふさわしい場面であった。

さらに物語ではこのような「明けぐれ」の性格が最も著しく表れている部分がある。柏木と女三宮の密通後の場面である。しかも四例も「明けぐれ」という言葉が集中的に記されているなど、「明けぐれ」の分析のため極めて重要な箇所である。

明けゆくけしきなるに、出でむ方なくなかなかなり。「いかがはしはべるべき。いみじく憎ませたまへば、また聞こえさせむこともありがたきを、ただ一言御声を聞かせたまへ」と、よろづに聞こえ悩ますも、うるさくわびしくて、もののさらに言はれたまはねば、「はてはては、むくつけくこそなりはべりぬれ。またかかるやうはあらじ」と、いとうしと思ひきこえて、「さらば不用なめり。身をいたづらにやはなしはてぬ。いと棄てがたきによりてこそ、かくまでもはべれ、今宵に限りはべりなむもいみじくなむ。つゆにても御心ゆるしたまふさまならば、それにかへつるにても棄てはべりなまし」とて、かき抱きて出づるに、はてはいかにしつるぞとあきれて思さる。隅の間の屏風をひきひろげて、戸を押し開けたれば、渡殿の南の戸の、昨夜入りしがまだ開きながらあるに、まだ①明けぐれのほどなるべし、ほのかに見たてまつらんの心あれば、格子をやをら引き上げて、「かう、いとつらき御心にうつし心も失せはべりぬ。すこし思ひのどめよと思されば、あはれとだにのたまはせよ」と、おどしきこゆるを、いとめづらかなりと思して、ものも言はむとしたまへど、わななかれて、いと若々しき御さまなり。なだ明けに明けゆくに、いと心あわたたしくて、「あはれなる夢語も聞こえさすべきを、かく憎ませたまへばこそ。さりとも、いま、思しあはすることとはべりなむ」とて、のどかならず立ち出づる②明けぐれ、秋の空よりも心づくしなり。

起きてゆく空も知られぬあけぐれにいつくの露のかかる袖なり

と、引き出でて愁へきこゆれば、出でなむとするにすこし慰めたまひて、

あけぐれの空にうき身は消えなむ夢なりけりと見てもやむ

べく

とはかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、聞きさすやう
にて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す。

(若菜下④227-229)

若菜下巻で、長年にわたり募りに募った女三宮への柏木の情念がついに二人の逢瀬をもたらした。その翌朝のことを描いている場面に、上のように「明けぐれ」が四例も使われている。一途な思いをようやく成し遂げたその喜びもむなしく、やがて「明けゆくけしきなるに」と、外の状況は女三宮のもとから退出せねばならぬ時間となった。さらに、もう二度と会えないかもしれないという思いから、柏木は「ただ一言御声を聞かせたまへ」と、女三宮に心の共感を求め、一言を切に念願する。しかし、まったく振り向いてくれない女三宮に対する柏木の堪えがたい心情が物語には「さらば不用なめり」以下、長々と記されているが、それがほかならぬ「まだ明けぐれのほど」の出来事であったという。その後、「ただ明けに明けゆくに」とあるように、刻々と夜が明けてゆくのであった。

さらに周りが明るくなり、女三宮との別れを惜しみ、それでもまだ語り続けたいという、その抑えきれない思いを抱き、柏木は「いと心あわたたし」になった。物語ではその柏木が、結局「のどかならず立ち出づる」しかなかったその時刻が「明けぐれ」(②)であったと記されている。ここで一つ注意しておきたいことがある。柏木が女三宮に対し、自分の気持ちを長々と訴えたその時間帯が物語では「明けぐれ」(①)として設定されていた。柏木がいよいよ帰って行こうとするその時は、「ただ明けに明けゆくに」という叙述からも分かるように、①の「明けぐれ」の時点よりはある程度時間が経ち、かなり周囲が明るくなっていたに違いない。時間の推移による周りの変化も波線部のように、「明けゆくけしきなるに」から「ただ明けに明けゆくに」と本文に明確に示されている。にもかかわらず、物語では依然としてその時間帯が「明けぐれ」であったと記されている。それはいかなる理由からであろうか。当該場面の②の「明けぐれ」については、確かに時間の経過という観点からすると不審な面があり、矛盾が生じているようにみえ

る。ただし、①に続き、②でも「明けぐれ」が用いられていることは、辞書に説明されているような「明けぐれ」の一般的な時間的意味よりも、その言葉から発せられるイメージをより重視した結果としてみるべきではないだろうか。すなわち、①の時点よりかなり明るくなっているにもかかわらず、あえて「明けぐれ」という言葉を用いることで、当該場面はそのまま暗い雰囲気を保つことができる。それに伴い、六条院からの退去を迫られる柏木の物思いに満ちた心内も、「明けぐれ」の印象と相まって、ますます暗さを帯びることになる。このように当該場面の②も「明けぐれ」として設定することで、密通後のこの場面全体を一貫した雰囲気のもとで織りなしていこうとする作者の意図をここに見出すことができるのであろう。先行研究で説明されているよう、「明けぐれ」の一般的な概念よりも、登場人物の心象や状況を表出する心理的な時間としての役割をより重視する『源氏物語』の姿勢が明らかになったと思われる。

柏木が六条院を立ち去ろうとした「明けぐれ」のとき、女三宮と交わした贈答歌には、二人それぞれの密通に対する思いがよく現れている。柏木は、夜明けの薄暗い時間に女三宮と別れて起きて行かざるを得ないその悲しさや心の混迷を、後朝のかたちを借りて詠みあげている。契りは交わしたものの、心の共感を得ることができず、退出を急ぎ立てられる柏木の重苦しい情念が、「明けぐれ」の暗さと響き合いながら表現されている。柏木にとっては、「明けぐれ」は念願の女三宮との逢瀬から現実の世界に戻らねばならない、もどかしさを痛感する時間であった。それに対し、女三宮にとって「明けぐれ」は、身のつらさや密通の罪の重さを一層実感させる時間である。女三宮は、明けぐれの空に自分のつらい存在が消え入ることを願っており、柏木との出来事はすべて夢であってほしいとまで言っている。同じく「明けぐれ」の言葉を共有していても、二人の心はまったく通い合うことなく、さらにそれぞれの心的位相にあわせて、その意味をたがえている。しかし、その根底には「明けぐれ」の語が持っている暗い深刻なイメージが基調として流れていることに留意する必要があるだろう。逢瀬は果たしたが、再会の保障もなく女三宮のもとを離れる、そうした悲痛な思いを抱いた柏木の帰る時刻がまさしく「明けぐれ」であったのである。

この柏木と女三宮の密通は、物語全体からしても極めて重要な意味をもつ事件である。今まで保たれてきた六条院の理想性が、その根底から揺さぶられるきっかけとなっているからである。こうした場面で「明けぐれ」の語が集中的に用いられていることは、この言葉が単なる薄暗い夜明け方を表す物理的時間帯を示すにとどまらず、より重要な意味を内包していることを示しているのであろう。

『源氏物語』の正編のほかの「明けぐれ」の例についても同様のことがいえる。物語のなかでもっとも理想的な人物として多くの人々に讃えられていた紫上が御法巻でとうとう世を去る。その紫上の死の直後、その悲しみのあまり、呆然としている残された人々の心境が「めづらかにいみじく、明けぐれの夢にまどひたまふほど、さらなりや」(御法④506)と記されている。また生前の紫上を回想し、哀傷する夕霧も「いにしへの秋の夕の恋しきにいまはと見えしあけぐれの夢」(御法④512)という歌を詠み、彼女を追慕しているが、この御法巻の場面でも人々の悲しみや嘆きを表現する際、「明けぐれ」という言葉がともに使われている。こうした例からも「明けぐれ」がこの物語のなかでいかなる意味合いやイメージとして用いられているかを充分読み取ることができると思われる。

「明けぐれ」という語は物語のさまざまな重要な場面で、しかも各登場人物の心情と深く結び付き、その晴れ難き思いや底知れぬ絶望感、または困惑した心などを表現することによって、それぞれの場面をまるでその深層から薄闇に包まれているような、悲しみに満ちた絶望的な場面として構築する鍵語として物語のなかでその役割を果たしているのである。

3. 宇治十帖の「明けぐれ」が意味するもの

宇治十帖にはこの「明けぐれ」が三例みられる。しかもすべての事例が薫と関連のある場面で用いられている。その最初の例は椎本巻でみられるが、その内容を簡単にまとめると次のようである。

八の宮の死後、忌みも果てたある日、薫は宇治を訪れ、大君と対面する。父を失い、悲嘆に暮れている大君を慰めているうちに、薫はは

じめて姫君たちを垣間見た日のことを思い出すが、そのことが「ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて」(椎本⑤198)と記されている。この叙述に対し、当該場面の『新全集』の頭注では、「最初にかいま見たときの印象。その場面では、霧はかかっていたが、「明けぐれ」ではなかった」と解している。橋姫巻の垣間見の場面は「月をかしきほどに霧りわたれるをながめて」「雲隠れたりつる月のはかにいと明くさし出でたれば」「霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず」(橋姫⑤139-140)と叙述されており、確かに「明けぐれ」ではない。椎本巻の場面で、橋姫巻の叙述と違ってそのときのことが「明けぐれ」と回想されるとしたら、それはいかなる理由によるのであろうか。

八の宮の死という悲しみをこらえて薫と対面はしているものの、深い傷心のあまり呆然とした大君の様子を痛ましく思った薫は、大君に「あはれ」を感じられずにはいられなかった。そうした大君の姿から橋姫巻の垣間見のことが導かれるのである。実は物語ではこの椎本巻の箇所以外にも、いくつか薫によってその垣間見の場面が思い出されているのである。「宇治の宮のこと語り出でて、見し暁のありさまなどくはしく聞こえたまふに」(橋姫⑤153)や「明け方近くなりぬらんと思ふほどに、ありししのめ思ひ出でられて」(橋姫⑤156)、及び「前のたび霧にまどはされはべりし曙に」(橋姫⑤157)などがそれぞれであるが、そこに現れている時間表現がそれぞれ異なっていることに注意する必要がある。つまり、同じ垣間見の場面の回想であるにもかかわらず、「暁」「しのめ」「曙」「明けぐれ」と、その時間表現に相違がみられるのである。そしてそれは薫の大君に対する気持ちの変化とあわせて考えることができると思われる。

はじめて姫君たちを垣間見て以来、薫は大君に恋心を抱くようになり、さらにその気持ちは高揚していく。深い道心の持ち主として物語に登場した彼が、物語が進行するにつれ、さらなる大君との親交を求め、徐々に恋の虜となっていくのであるが、椎本巻の「明けぐれ」にはそうした薫像を暗示する意味も内包されているのではないだろうか。実際、椎本巻の「明けぐれ」の叙述の直前、大君と対面した薫は、親交を懇願するにあたり、自分の気持ちを率直に言わず、大君との親交はあくまで八の宮の意向であると、宮の遺言を用いて大君を説得しようとしている(椎

本⑤197)。大君に対する恋心は純粹で真摯なものであるにせよ、その恋を成就させるため、さまざまな方法を模索していく過程で、薫の気持ちは次第に屈折していく。大君への憐憫に加えて執心も増していくのであった。そうした両面的な薫の心の状態を反映するかたちで、この回想場面では実際の橋姫巻の情景とは違い、明と暗がともに存在する「明けぐれ」の出来事として想起されているとみることができるのであろう。

さて、薫は自分の恋心を全然受け入れてくれようもしない大君への対策として、中の君を匂宮と結ばせようとする。そうすれば自然に大君は自分のものになるに違いないと思ったからである。薫はそのことを相談するため、匂宮が滞在している二条院に向かい、宮と対面するが、その際の様子物語では「さもおはせなむと思ひなるやうのあれば、例よりはまめやかに、あるべきさまなど申したまふ。明けぐれのほど、あやにくに霧りわたりて、空のけはひ冷やかなるに、月は霧に隔てられて、木の下も暗くなまめきたり」(総角⑤260)と記されている。この場面の雰囲気は霧が反復されているなど、全体的に暗くて重い。そこで匂宮に対し、真剣に中の君への手引きの方法などを語っている薫。まるでそうした薫の歪んだ執着を象徴するかのように、「明けぐれ」が時間的背景として設定されているのである。

最後に「明けぐれ」の言葉がみられるのは、総角巻の「しるべせし」の歌の部分である。

(I)「あが君、御心に従ふことのたぐひなければこそ、かくまでかたくなしくなりはべれ。いひ知らず憎く疎ましきものに思しなすめれば、聞こえむ方なし。いとど世に跡とむべくなむおぼえぬ」とて、「さらば、隔てながらも聞こえさせむ。ひたぶるになうち棄てさせたまひそ」とて、ゆるしたてまつりたまへれば、這ひ入りて、さすがに入りもはてたまはぬを、いとあはれと思ひて、「かばかりの御けはひを慰めにて明かしはべらむ。ゆめゆめ」と聞こえて、うちもまどろまず、いとどしき水の音に目も覚めて、夜半の嵐に、山鳥の心地して明かしかねたまふ。例の、明けゆくけはひに、鐘の声など聞こゆ。いぎたなくて出でたまふべき気色もなきよと心やましく、声づくりたまふも、げにあやしきわざなり。

「しるべせしわれやかへりてまどふべき心もゆかぬ明けぐ
れの道

かかる例、世にありけむや」とのたまへば、

かたがたにくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまどはば
とほのかにのたまふを、いと飽かぬ心地すれば、「いかに。こよな
く隔たりてはべるめれば、いとわりなうこそ」など、よろづに恨み
つつ、ほのぼのと明けゆくほどに、昨夜の方より出でたまふなり
(総角⑤266-268)

大君を思慕するあまり、大君を自分のものにすべく方法をめぐらした薫は、中の君を匂宮と結ばれるという策略を立て、ついそれを実行する。匂宮にその方法を相談した後、宮とともに宇治を訪れたのである。暗い闇に紛れて、匂宮を中の君のもとに導かせた後、薫は大君と対面し、その事実を明かす。それを聞いた大君はあまりの衝撃で呆然とするしかなかった。その後、薫は大君のもとから離れず、二人は事無き夜を過ごすのである。(I)はその後、二人の様子を描いた部分である。夜明けをともに迎えた薫と大君の心境が宇治の自然風景の描写とともに詳しく語られているなか、この場面ではとくに薫の行き場のない絶望感が何より際立っている。ひたすら大君に対する自分の気持ちを訴える薫であったが、大君はそれを聞き入れようもしない。さらに、せめて「物隔て」を通しての対面をと切に願っている薫に対し、頑なな態度でそれを拒んでいる。大君との対面の機会すら消滅してしまったという薫の悲嘆に満ちた心境が、ついに「しるべせし」の一首を導き出したのであるが、この歌で薫は恋の案内役をした自分の方が、まったくその甲斐もなく、満たされぬ気持ちで帰らざるを得ないとその現状を嘆いている。薫の暗澹たる心情が、「まどふべき」「心もゆかぬ」という歌語を通して如実に表れているが、薫はそのように自分がかえって惑うことになるに違いないその時刻がほかならぬ「明けぐれ」であるとつぶやいている。限りなく悲しみながら嘆いている薫の様子だが、この「明けぐれ」の語を媒介とし、より一層鮮明に表れることとなったと思われるが、こうした例からも登場人物の心の惑乱を象徴するというその性格をじゅうぶん感じ取ることができるであろう。

ところで、実は総角巻では今までみてきたこの(Ⅰ)の場面と大変類似している部分がもう一箇所ある。八の宮の一周忌近い頃、宇治を訪問した薫がはじめて大君の部屋に闖入し、事無き夜を過ごした後、夜明けを迎えた二人の姿が描かれている箇所である。

(Ⅱ)はかなく明け方になりけり。御供の人々起きて声づくり、馬どものいばゆる音も、旅の宿のあるやうなど人の語る思しやられて、をかしく思さる。光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のあはれなるをもちともに見たまふ。女もすこしゐざり出でたまへるに、ほどもなき軒の近さなれば、しのぶの露もやうやう光見えもてゆく。かたみに、いと艶なるさま容貌どもを、「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にもて遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」と、いとなつかしきさまして語らひきこえたまへば、やうやう恐ろしさも慰みて、「かういとはしたなからで、物隔ててなど聞こえれば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」と答へたまふ。明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。夜深き朝の鐘の音かすかに響く。(中略)「あな苦しや。暁の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」と嘆きがちなり。鶏も、いづ方にかあらむ、ほのかに音なふに、京思ひ出でらる。

山里のあはれ知らるる声々にとりあつめたる朝ぼらけかな女君、

鳥の音もきこえぬ山と思ひしを世のうきことは尋ね来にけり障子口まで送りたてまつりたまひて、昨夜入りし戸口より出でて、臥したまへれどまどろまれず。なごり恋しくて、いとかく思はましかば、月ごろも今まで心のどかならましやなど、帰らむこともものうくおぼえたまふ。(総角⑤237-239)

(Ⅰ)と(Ⅱ)は、両方とも「疑似後朝」の場面であり、その表現や構図の面において相当な類似点がみられる。

(Ⅰ) 夜半の嵐に、山鳥の心地して明かしかねたまふ。例の、明けゆくけはひに、鐘の声など聞こゆ。

(Ⅱ) 明くなりゆき、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。

夜深き朝の鐘の音かすかに響く。

(Ⅰ) 這ひ入りて、さすがに入りもはてたまはぬを、いとあはれと思ひて

(Ⅱ) 空のあはれなるをもちともに見たまふ。女もすこしゐざり出でたまへるに

(Ⅰ) 「さらば、隔てながらも聞こえさせむ。ひたぶるになうち棄てさせたまひそ」とて

(Ⅱ) 「かういとはしたなからで、物隔ててなど聞こえば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ」と答へたまふ。

(Ⅰ) いぎたなくて出でたまふべき気色もなきよと心やましく、声づくりたまふも

(Ⅱ) はかなく明け方になりけり。御供の人々起きて声づくり

(Ⅰ) しるべせしわれやかへりてまどふべき心もゆかぬ明けぐれの道

(Ⅱ) まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを

それぞれ類似していると思われる部分を列举してみたが、情景描写や情況設定、そして「隔て」「あはれ」「まどふ」などの表現が用いられている点などから両場面の類似性が確認できたと思われる。そのみならず、さらに薫による大君への愛情の告白と二人の贈答歌の配置という面までも似ている。しかしながら、この二つの場面はその位相がまったく異なっているのである。

薫の強引な行動に困惑していた大君であったが、(Ⅱ)の場面では前夜の様子とは違い、薫とともに「あはれなる」明け方の空を眺める。二人の姿はまるで相愛の男女の間のようにみえる。そこで薫は「あな苦しや。暁の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」と、通常の後朝のように、その別れを惜しみ、「山里の」の歌を詠むのである。無論、実事無き後朝の対するその複雑な心境が表れてはいるものの、大君と宇治で夜明けを一緒に迎えたことに「あはれ」を感じ、どこか彼女との明るい未来を期待しているような薫の心情がうかがえるのも事実である。一方、(Ⅰ)ではすでに述べたように、大君に拒絶され、「心もゆかぬ」「まどふべき」思いを抱き、無念で薄暗い道を帰らざるを得ない薫の絶望感や鬱屈な雰囲気が出るところに漂っている。

表現や構図などの場面設定においては類似している総角巻の二つの場面が、実はその内実においては極めて大きな相違を有することが明らかになったと思われる。そのうえ、ここで何より注目しておきたいことがあるが、それは(Ⅰ)と(Ⅱ)の薫の心情を表す部分で、「暁」と「明けぐれ」という異なる言葉が用いられていることである。地の文をみると、「例の、明けゆくけはひに」「はかなく明け方になりけり」「明くなりゆき」と、単にその夜明けの状況のみが記されているのに、薫自身によって「暁」「明けぐれ」と使い分けられているのである⁹⁾。無論、「暁」も「明けぐれ」も男女の別れの時間ではあるが、ここでこのように区別されていることは、各場面での薫の置かれている状況を念頭に入れて考えてみると、単なる偶然ではなく、作者の意図性を読み取ることができる。つまり、この二つの場面に意図的に「明けぐれ」と「暁」という異なる言葉を使うことで、それぞれ雰囲気や印象の違う場面として描いていこうとすることが分かる。言い換えれば、意味上では同じく夜明け頃のまだ暗い時分を表す言葉であるにもかかわらず、総角巻の「疑似後朝」の場面では、薫の心境と合わせて、恋に対する期待やその喜び(Ⅰ)と、その恋の不成立の予感からくる暗澹たる心情(Ⅱ)を象徴するように、こうした言葉が用いられているといえるのではないだろうか。そしてこれはほかならぬ、先行研究で多く論じられてきた、物語のさまざまな重要な場面で、しかも登場人物の心理と深く結び付き、堪えがたい苦しみや底知れぬ絶望感、あるいは惑乱した心を象徴する言葉であるという「明けぐれ」の特徴をより克明に表している例として理解してもよいと思われる。

以上、『源氏物語』に現れている「明けぐれ」の事例を詳しく検討してきた。宇治十帖においても『源氏物語』の正編同様、物理的な時間というよ

9) 「暁」の意味について、『岩波古語辞典』では「夜が明けようとして、まだ暗いうち」であると説明している。また薫の歌に詠まれている「あさぼらけ」も「夜がほんのりと明けて、物がほのかに見える状態。また、その頃」という意味を持っており(大野晋(1974)注1の前掲書、p. 6、p. 23)、一応明け方を表す言葉ではあるが、「あさぼらけ」はある程度明るさをました時刻であり、「暁」とはその状況の相違がみられる。ただし、「明けぐれ」と「暁」はほぼ同じ意味であり、そこでこの場面では主に「暁」と「明けぐれ」の違いについて焦点を絞って論ずる。

り、心的な時間として存在する「明けぐれ」の性格がさらに明確になったと思われる。さて、次節ではこうした事実をもとに、本稿の重要な目的である『源氏物語』正編の受容と変容という問題を、この「明けぐれ」という言葉を対象に、とくに「源氏取り」と関連付けて考えてみたいのである。

4. 「源氏取り」と「明けぐれ」

すでに書かれている正編の言葉を用い、続編を描き出す一つの手段とするこの「源氏取り」という方法。宇治十帖における「源氏取り」を考える際、その核心的な内容をなしているのが、薫をめぐる柏木物語の引用であり、そのなかでも「明けぐれ」は「柏木の血をうけた薫の主題的位相を象徴することば」として、柏木物語と宇治十帖、とくに薫との影響関係を示す語であると、その意義が評価されている¹⁰⁾。薫が柏木の実の子であること、また柏木と女三宮との密通の場面で四回も集中的にこの言葉が使われていることなど、状況的な類似性を勘案すれば、とくに柏木物語との深い影響関係を認めることができるであろう。

(薫) しるべせしわれやかへりてまどふべき心もゆかぬ明けぐれの道
(大君) かたがたにくらす心を思ひやれ人やりならぬ道にまどはば

上は前掲の(Ⅰ)の総角巻での薫と大君の贈答歌である。薫の歌については古くから『能宣集』の「あけぐれのみちにぞけさはまどひつるおもふころのゆかぬまにまに」(7)¹¹⁾の歌を引歌として挙げている。「あけ

10) 高橋亨(1977)注2の前掲論文、p.159. また池田和臣氏も「柏木物語の歴史を染めつけられたことば「あけぐれ」が、薫と柏木の主題的なつながりを示すのであり、薫は柏木の恋いを背負っていかされているといえよう」と同様の指摘をしている(池田和臣(2001)注3の前掲論文、pp.237-238)。

11) 詞書は「人のもとよりまかりかへりてつかはす」。歌の引用は新編国歌大観編集委員会監修(1996)『新編国歌大観』(角川書店)による。またこの能宣の歌は、『拾遺集』に、「女のもとよりくらきにかへりてつかはしける」という詞書で、「あけぐれのそ

ぐれのみち」「まどひつる」「こころもゆかぬ」という語句からして、薫の歌がこの歌の影響を受けているのは確かであろう。この薫の歌については、前節で少し説明したが、ここでは柏木物語の受容という観点から、大君の返歌と合わせてもう一度検討してみたいと思う。大君に拒まれ、満たされぬ思いで、まるで「明けぐれ」のように暗い心の状態で惑っていると薫は訴えるが、これに対し、大君は「まどふ」「道」と、薫の歌と同じ歌語を使い、また「明けぐれ」には「くらす」という語で応じながら、その「惑い」というのは、実は薫自身が招いたもので、薫によって自分たち姉妹がむしろ悩んでいるという事実をぜひ分かってほしいと切り返している。表面上には薫の歌を受けて詠み返しているが、その深層ではまったく薫との心の共有を見出すことができない。当該場面の二人の様子からは、心の共感どころか、薫と大君の心情が限りなくかけ離れていることを明瞭に表している。この構図は若菜下巻で同じ「明けぐれ」を詠みながらも、その位相の相違が際立っていた柏木と女三宮との贈答歌の場面を連想させる。こうした観点からみても、当該歌に表出されている二人の心境には、やはり柏木物語から受け継がれた「明けぐれ」の影が色濃く残っているといえるのであろう。さらに、この贈答歌には「明けぐれ」のみならず、柏木物語のほかの場面からの影響もみられる。

「いまはとて燃えむ煙もむすばほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ
あはれとだにのたまはせよ。心のどめて、人やりならぬ闇にまど
はむ道の光にもしはべらむ」と聞こえたまふ。（柏木④291）

引用した部分は、死の直前、すっかり衰弱していた柏木が、最後に女三宮に自分の気持ちを訴える場面である。柏木は死を覚悟し、断ち切れない女三宮への思いを切実な心情で歌っている。続く柏木の言葉によると、柏木は宮との密通とそれがもたらすわが身の破滅というのは、すべて自分が招いたもの、自ら求めてさまよう無明の闇であると認識していることが分かる。女三宮への恋慕の結果を、ほかならぬ

らにぞ我は迷ひぬる思ふ心のゆかぬまにまに」(736)としてみられる。ただし、『拾遺集』ではこの歌の作者を源順と記している。

「人やりならぬ闇にまどはむ道」として柏木は捉えているのである。

ここで一つ注目したいことがある。この柏木の言葉が、前掲の大君の返歌の下句「人やりならぬ道にまどはば」と極めて類似していることである。上の句の「くらす」も「明けぐれ」を受けての言葉であり、ここに「闇」の意味も含まれているのであろう。柏木の生涯も、薫が柏木の実の子であることも知るはずのない大君によって、薫の恋が、「自分が好んで惑うことになった道」とであると、まったく柏木と同じものとして受けとめられ、拒まれているのである。すでに書かれている物語を宇治十帖で自ら引用する、いわゆる「源氏取り」の方法により、執念に惑う柏木の姿が、そのまま薫にもオーバーラップされる。恋の道において惑い、低迷していく薫像の深層には、満たされぬ思いのため迷走し、無明長夜の闇に堕ちてゆく柏木の影が根強く潜められているのである。それにより、柏木・薫二人の主題の有機的な連繋が物語のなかで自然に構築されるようになるのである¹²⁾。

またこの「まどふ」は「明けぐれ」とも深く関係のある言葉である¹³⁾。すなわち、「明けぐれ」が表す情念の暗い惑乱を表すのが、ほかならぬ「まどふ」である。薫の「しるべせし」の歌には、かねてから『能宣集』の歌が引歌として挙げられていた。前述したように、確かにこの歌は薫の歌と言葉の面で大変類似している。しかしながら、女のもとから帰ってきた後、その別れを惜しみ、もっと一緒にいたいという気持ちが叶えられなかったことに心が乱れ、夜明けの帰り道で惑ってい

12) 柏木の「いまはとて燃えむ煙もむすばほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ」の歌の「むすばほれ」「思ひ」という言葉も、匂兵部卿巻で薫が自分の出生の疑惑について苦悩する場面の「かの過ぎたまひにけんも安からぬ思ひにむすばほれてや、など推しはかるに、世をかへりても対面せまほしき心つきて」(匂兵部卿⑤24)という叙述に反映されている。恋に煩悶する柏木の気持ちが「むすばほる」という言葉を通して現れ、それでもやはり断ち切れない女三宮への柏木の執念が表現されているが、その柏木の恋愛沙汰も、またこの柏木の最後の歌も知る由のない薫が、柏木が使った言葉をそのまま用い、まさに柏木の生を執念深いものとして推測している。ここでも引用による表現の一体化という方法を使用し、彼の生が柏木の生と深くつながっていることを、登場人物である薫本人の認識の領域を超えて、物語の次元で早くも示しているのである。

13) 高橋亨氏は「『明けぐれ』は〈夢〉と〈まどひ〉の時空」と述べている(高橋亨(1977)注2の前掲論文、p.161)。

たと、その愛情の深さを訴える『能宣集』の歌は、大君に拒まれ、悲痛な気持ちで、「明けぐれ」の帰り道に惑ってしまうと詠みあげている薫の心情とは遠く懸け離れているのではないだろうか。薫のこの「しるべせし」の歌は、措辞の面は勿論、歌の根底における情緒的な趣からも、むしろ、今まで見てきた柏木物語とより緊密につながっていると思われる。これもまた「源氏取り」によってもたらされた効果であろう。

柏木物語を通し、「明けぐれ」のイメージがさらに作り上げられるのであるが、その「明けぐれ」のイメージが宇治十帖に取り入れられ、惑いの要素として薫の心情によく投影されることで、薫の物語は柏木物語との類似性、および主題的なつながりを持つことができたと思われる。物語ではそれを柏木と薫の血縁関係による事実起因するというふうに単純化するのではなく、あくまでも表現の次元でより明確にしようとしている。そのうえ、明と暗とが共存していながら、闇の部分がより一層強調されている「明けぐれ」の意味を吟味すればするほど、この言葉が物語における薫の運命を予見する言葉として、その機能を果たしているようにみえる。理想性と俗物性や色好みの側面が混在している薫の、これからの物語の展開において、さらに負の側面に寄り添い、迷妄を深めていくその低迷ぶりを、改めてこの言葉は暗示しているのではないだろうか。薫のそういう多面性により、大君や浮舟との関係において、互いに深い共感を抱いていながらも、結局その恋が実ることなく終わるという、その恋の深層にある悲しみやはかなさなどを描き出すことができた¹⁴⁾。これは柏木物語とは異なる結末である。単なる言葉の引用とその意味の踏襲ではなく、宇治十帖の論理に基づき、さらなる想像力を発揮して発展的に再生産することにより、新たな意味合いが生み出されているのである。

柏木物語の意図的な受容と宇治十帖の論理に合わせた変容。これこそ宇治十帖における正編の引用、「源氏取り」の最も特徴的なあり方であり、それによって宇治十帖は正編とは違う独自の物語世界を織りなしていくことができたと思われる。

14) 尹勝玟(2012)「多面体としての薫」『日語日文学研究』第83輯2巻、韓国日語日文学会、p.225.

5. おわりに

以上、「明けぐれ」という言葉を対象に、主に宇治十帖を中心に、『源氏物語』の正編からの影響関係などに重点を置いて考察してみた。『源氏物語』では全十三例表れており、そのうち、五例が作中歌のなかで詠まれている。『源氏物語』以前は、その例すらあまりみることでできなかったこの言葉であったが、『源氏物語』を通し、歌語としての性格も確立された。『源氏物語』以降、「明けぐれ」は歌などによく詠まれることになる。たとえば、俊成卿女は「消えはつるゆふべもかなしあけ暮の夢にまよひしはるのふるさと」(『俊成卿女集』三解)という歌を詠むのであるが、実はこの歌は、御法巻の夕霧の歌を本歌として「明けぐれ」の心情を詠んでいるのである。こうしたことから、まず文学史におけるこの言葉の意義を認めることができよう。

さらに、まだ夜が明け切る前の薄暗い時間帯を表す「明けぐれ」という語は、『源氏物語』を通して単なる物理的時間帯を示す次元を超え、晴らし難く悲痛な心境や絶望感など、心的状態を表す言葉としてその具体的な意味やイメージが確立されるようになる。またこの語は、いわゆる「源氏取り」の核心をなしている言葉でもある。正編で構築された「明けぐれ」の語の独自のイメージの引用、とくに柏木物語からの影響により、薫と女君との恋物語の悲劇性を一層鮮明にするとともに、薫の運命の行方をも予見する。そういう意味で、「明けぐれ」は宇治十帖における「源氏取り」の観点からすると、大変重要な言葉、いわゆるキーワードの一つである。ただし、宇治十帖では単に柏木物語の要素を踏襲して受け入れるのではなく、宇治の物語世界の論理に基づき、さらなる想像力を発揮して再創造している。

このような柏木物語、さらには『源氏物語』の正編の意図的な受容と変容。これこそ、宇治十帖における最も特徴的な引用のあり方であり、それにより、宇治十帖の独自性は保たれる。またこうした「明けぐれ」の引用と想像力により、宇治十帖の深部の挫折や絶望感が明らかになり、深い傷を抱いている者同士の、相互に共感を持っていながらもけっして結ばれることのない悲劇的な恋物語とそれに伴う苦しみとが物語のなかで実現されるようになった。本稿ではこうした物語の全

体像を特に「明けぐれ」という言葉に注目して考えてみたのである。

参考文献

- 尹勝玫(2012)「多面体としての薫」『日語日文学研究』第83輯2巻, 韓国日語日文学会, p.225.
- 池田和臣(2001)「引用表現と構造連関をめぐって - 第三部の表現構造 -」『源氏物語表現構造と水脈』武蔵野書院, pp.204-245, p.323.
- 井野葉子(1997)「〔研究の現在と展望〕- 宇治の風景 -」王朝物語研究会編『研究講座 源氏物語の視界5 薫から浮舟へ』新典社, pp.376-384.
- 大野晋 他編(1974)『岩波古語辞典』岩波書店, p.6, p.15, p.23.
- 小町谷照彦(1984)「レトリックとしての歌ことば - 薫の大君への求婚の形象 -」『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会, pp.288-293.
- 河添房江(1988)「宇治の暁 - 闇と光の喩の時空 -」『源氏物語の探究』第十三輯, 風間書房, p.207.
- 高橋亨(1977)「源氏物語の内なる物語史」『源氏物語対位法』東京大学出版会, pp.153-163.

성 명(한 글) : 윤 승 민
(한 자) : 尹 勝 玫
(영 문) : Yoon, Seong-Min
논문영어제목 : A Study of The Uji Chapters's Akegure ("Dawn")
- Focusing on Transformation and Acceptance of
"Tale of Genji" Main Part of a Book -
소 속 : 영동대학교 일본어과 시간강사
E-mail : miny98@hanmail.net

투 고 일 : 2014년 1월 4일
심사개시일 : 2014년 1월 13일
심사완료일 : 2014년 2월 4일